

令和五年十月二十一日

麻生区文化祭

第三十五回麻生区俳句大会

入
選
句
集

主催 麻生区文化協会
会場 麻生文化センター



第三十五回麻生区俳句大会開催に当って

麻生区文化協会

会長 菅原 敬子

今年は熱中症危険信号が連日だされる猛暑に外出もままならぬ夏でした。また、コロナウイルスやインフルエンザ等の感染症も絶滅されず子どもたちにとつても夏休みさえ楽しく過ごすことができない状況にありました。暑さ寒さも彼岸までとはならぬ地球温暖化がすすんでいます。

しかし、麻生区文化協会では例年の「夏休み親子教室」の開催などの行事や活動を続け多くの子どもたちに参加を頂きました。

さて、今年で第三十五回を迎える俳句大会を開催しましたところ多くの方に投句を頂きました。投句数四三九句でした。心よりお礼申し上げます。又、選者の皆様のご協力により選句いただき、各賞を決めさせて頂きました。有りがとうございます。心よりお礼申し上げます。川崎市長賞をはじめ九つの賞と二十句の優秀賞に入賞された方々、おめでとございませう。

ここに入選句を掲載した「第三十五回麻生区俳句大会入選句集」を作成しましたのでお届けいたします。

麻生区は日本一の長寿の里(男女共に)となりました。まさに高齢化は年々進んでおり投句された方々も選者をお願いしている方も同じ状況にあります。

文化協会は「あたらしい風と創造」をテーマに季節を詠み、日常を詠む俳句を愛する麻生の風土を大切に多くの方々と共に、この歴史ある大会の一層の発展にむけ、これからも努めて参ります。

近頃はメディアやスマホを使つての交流が盛んであり、テレビ放映もされています。

皆様の句会にぜひ若い方、俳句ははじめてという方をおさそい下さいまして俳句を広めて頂きたく思います。

来年もぜひ投句下さいませようお願いします。皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

令和五年(二〇二三年)十月吉日

プログラム

第一部

- 一、開会の辞
- 一、会長挨拶
- 一、来賓挨拶
- 一、表彰
- 一、閉会の辞

第二部

- 一、当日席題句会
- 一、披講

- 一、高点句の発表・賞品授与

司会 アカデミー部 橋本 周

アカデミー部 横川 はつこう

文化協会会長 菅原 敬子

実行委員長 山室 茂樹

司会 アカデミー部 橋本 周

参加者全員

アカデミー部 横川 はつこう

アカデミー部 花輪 佳子

実行委員長 山室 茂樹

補佐・アカデミー部 関森 田鶴子

麻生区文化祭 第三十五回麻生区俳句大会 入賞作品

川崎市長賞

麻生川風が舵取る花筏

大橋政雄

川崎市議会議長賞

日本一長寿の里や柿たわわ

北條雨鮎

川崎市教育委員会賞

蜻蛉のふはりと風の高さかな

春永真央

麻生区文化協会会長賞

縞なして田の神渡る青田風

馬場身江子

麻生区長賞

足るを知る暮し重ねて新茶汲む

高品小溪

麻生市民館長賞

思い切り手を挙げて来る夏帽子

角田珠子

川崎市総合文化団体連絡会理事長賞

麦笛や少年はみな風を負ひ

都留嘉男

川崎市観光協会会長賞

露草は星の欠片の瑠璃こぼす

井上美沙子

麻生観光協会会長賞

手際よき庭師の缺涼しかり

秋場正美

○ 優 秀 賞

山百合や帯解くやうにちり初^そむる

野沢佐々代

竿一本足し帰省子の濯ぎもの

山口ちひろ

柿熟るる長寿の里の農詩人

山室みゆき

休耕田父母を偲ぶや里の秋

笠原 秋水

鈴^{りん}打ちて余韻の長き今朝の秋

池内 英夫

乗り継ぎはサルビアだけの小さな駅

芹澤しよう子

浜駆ける蹠より夏立ちにけり

貴島 閑歳

ぽんぽんと叩かれ西瓜買はれけり

早川 靖子

向き合へば踏み出す如き菊人形

森 一二

母の日や母の文字ほど佳き字なし

大川 和子

日本一の長寿言祝ぐ蟬時雨

朝岡芙貴代

夏来たるブックカバーは空の色

本多 信子

風薫る大樹堂々空を掃く

塩澤 烈子

争ひて軋む地球や星流る

滝澤 義忠

絵手紙に一句も添えて夏野菜

原 佳子

秋深し土はすべての死を抱き

梶野貴久子

きつぱりと畳拭きあげ終戦日

小林 温子

桜散る真つ只中の孤愁かな

梅野 威彦

何ひとつ置かぬ百畳寺涼し

雨宮寿美子

梵鐘の音新涼の風起こす

伊原 文夫

朝岡 芙貴代 選

特選

思い切り手を挙げて来る夏帽子 角田 珠子

今年米「ワレモノ」と記し送りけり 山口ちひろ

冷奴どこから攻めて崩そうか 河野真砂子

入選

手の染は私の勲章梅を干す 細貝 昭吾

富士山と水が自慢の冷奴 馬場身江子

願い事重し重しと七夕竹 馬場身江子

夏柳川面の空を掃きゐたる 都留 嘉男

ホームランの角度で柿の種とばし 衣笠みちを

カラコロと迫る落ち葉に追い越され 扇谷 正紀

蜻蛉のふはりと風の高さかな 春永 真央

コンサートの余韻掻き消す蟬時雨 鈴木 祥子

戦へるゴム鉄砲と水鉄砲 金森 俊子

こめかみをジンジン攻めてかき氷 馬場身江子

能書きも壁に新し走り蕎麦 藤森 成雄

八寸の秋をいただく京泊り 野木 啓道

池内 英夫 選

特選

瞑想のゴリラにやりと神の留守 小暮 航一

梵鐘の音新涼の風起こす 伊原 文夫

移り香の含みてたたむ花衣 安楽 昌泰

入選

縞なして田の神渡る青田風 馬場身江子

風薫る大樹堂々空を掃く 塩澤 烈子

墓碑銘は「偲」の一字雪螢 都留 嘉男

露草は星の欠片の瑠璃こぼす 井上美沙子

麻生川風が舵取る花筏 大橋 政雄

盆ざるに海の色なる秋刀魚二尾 井上 加代

きつぱりと畳拭きあげ終戦日 小林 温子

静寂を待ちて自慢の鉦叩き 高野 香子

蜻蛉のふはりと風の高さかな 春永 真央

食卓に一陣の風冷奴 佐藤 次郎

宿題のまだまだできぬ法師蟬 渡部 風華

レイトショー果てて無月の昇降機 後藤 園生

池之上 輝夫 選

特選 向き合へば踏み出す如き菊人形

森 一二

決勝戦子に新米の大むすび

雨宮寿美子

卒業の師の一語もて旅立ちぬ

野木 啓道

入選 一斉に風吹きわたる芒原

富山ゆたか

改札の奥に陣取る初帰燕

本多 孝次

絵手紙に一句も添えて夏野菜

原 佳子

まだ止めぬ百才参加含羞草おしぎそう

坂本 巴

手際よき庭師の缺涼しかり

秋場 正美

泥大根葉付きも人氣直売店

大橋 政雄

ユーミンの歌声聞こゆ文化の日

伊原 文夫

日本一の長寿言祝ぐ蟬時雨

朝岡芙貴代

月天心波にきらきら月の道

梶野貴久子

干し台の鱒の艶やか伊豆網代

渡辺 和子

一病を大事に生きて大昼寝

馬場身江子

町おこし担ふ音大合歓の花

後藤 園生

内山弘 幸 選

特選 水打ちて木の影土に貼りつかす

池内 英夫

山百合や帯解くやうに散り初そむる

野沢佐々代

蜻蛉のふはりと風の高さかな

春永 真央

入選 願い事重し重しと七夕竹

馬場身江子

風薫る大樹堂々空を掃く

塩澤 烈子

草刈つて夕暮れの山近くなる

池内 英夫

シャルウィダンス翼拡げて番鶴

長谷川英俊

麻生川風が舵取る花筏

大橋 政雄

露けしや一揆誓ひし連判状

伊原 文夫

まなうらに花火しだるる帰路のバス

大谷袈裟次

きっぱりと畳拭きあげ終戦日

小林 温子

何ひとつ置かぬ百畳寺涼し

雨宮寿美子

留守電に亡き友の声夏の果

中井紀久子

後の事はあとに託さむ蛇穴に

米井 克夫

八寸の秋をいただく京泊り

野木 啓道

笠原秋水選

特選

麻生川風が舵取る花筏

大橋 政雄

向き合へば踏み出す如き菊人形

森 一二

黙禱の鐘の余韻や敗戦日

西川 陽子

入選

梅雨明けやすつくと立てる男富士

馬場身江子

墓碑銘は「偲」の一字雪螢

都留 嘉男

山百合や帯解くやうに散り初そむる

野沢佐々代

柿熟れて絵となる里の雅かな

森 一二

永らへて語部となる終戦忌

松原賀壽子

白南風や右卿の書は燕

滋野 暁

一病を大事に生きて大昼寝

馬場身江子

蜘蛛の罫や我の怠惰を知り尽くし

野口 和子

窓開けて吸ひ込む匂ひ遠花火

河野眞砂子

夕映えに色を極める秋茜

早川 靖子

手際よき庭師の缺涼しかり

秋場 正美

語部は卒寿になりて敗戦忌

鯉淵 彩香

齋藤秀章選

特選

麦笛や少年はみな風を負ひ

都留 嘉男

万緑や炎噴き出る窯の窓

深野 怜

とぎれつつ風にのりくる踊唄

早川 靖子

入選

終雪や生き急ぐなと天の声

内山 元

山鳩のくぐもる朝や合歡の花

山室みゆき

みちのくの浜に人無き雁供養

都留 嘉男

鈴打ちて余韻の長き今朝の秋

池内 英夫

露草は星の欠片の瑠璃こぼす

井上美沙子

秋立つや青墨の香に明けそむる

梶野貴久子

露けしや一揆誓ひし連判状

伊原 文夫

しなる竿鯉次々弧を描く

神宝 浩

思い切り手を挙げて来る夏帽子

角田 珠子

一病を大事に生きて大昼寝

馬場身江子

露寒し逝く妻摩る老夫の手

亀谷 学

春うらら手足おもちゃに遊ぶ嬰

早川 靖子

齊藤 誠 選

特選 稿なして田の神渡る青田風

欲張らず悔いなく二人敬老日

露草は星の欠片の瑠璃こぼす

入選 闊歩する日傘男子の咽仏

遣されし百のアルバム虫すだく

母の味しつかと残す芋煮膳

獅子の鼻はなれ難しと蟬の殻

敬老日卒寿たをやかヨガポーズ

砂浜の二人の距離や晩夏なり

尾根道や草の陰から虫の声

泥んこを叱らぬ母や遠き夏

競ひあふ草と成長夏野菜

菜園の蝶を払わぬ終戦忌

鉄棒や秋風裂いて蹴り上げる

学舎のチャイムの音色秋深し

馬場身江子

原 佳子

井上美沙子

細貝 昭吾

嘉瀬志津子

森 一二

横川はっこう

雨宮寿美子

梅原 操

齊田 裕子

齋藤 秀章

庄司すずこ

笠原 秋水

玉川 孝月

三浦貴美子

塩澤 烈子 選

特選 島唄や水平線へ翳雲

しなる竿鯉次々弧を描く

日本一長寿の里や柿たわわ

入選 独り居に汝も華客よ石叩き

鈴打ちて余韻の長き今朝の秋

稲妻の一太刀浴びるホームかな

麻生川風が舵取る花筏

秋風や仕舞はれしままバスポート

春障子両家は今日が初対面

一輪の笑みに足止む朝顔市

大陸の露ふむ兄の征く姿

濃く淡く囁き合うて秋桜

親潮や閉じることなき秋刀魚の目

蜘蛛の囀や我の怠惰を知り尽くし

愛し妻闘い尽きて露と消え

山室みゆき

神宝 浩

北條 雨鮎

上山 暢子

池内 英夫

秋場 正美

大橋 政雄

大谷袈裟次

鯉淵 彩香

朝岡芙貴代

南 孝子

春永 真央

花輪 佳子

野口 和子

亀谷 学

菅原敬子 選

特選

縞なして田の神渡る青田風

馬場身江子

雨去りぬ光をこぼす柿若葉

梶野貴久子

こめかみをジンジン攻めてかき氷

馬場身江子

入選

風薫る大樹堂々空を掃く

塩澤 烈子

独り居に汝も華客よ石叩き

上山 暢子

初蟬や雨後の朝日をよじのぼる

池内 英夫

下駄の音肌に単衣の軽やかさ

秋場 正美

山百合や帯解くやうに散り初ちむる

野沢佐々代

麻生川風が舵取る花筏

大橋 政雄

秋深し土はすべての死を抱き

梶野貴久子

菓缶ごと麦湯飲む児ら丸坊主

梅原 操

柿熟るる長寿の里の農詩人

山室みゆき

休耕田父母を偲ぶや里の秋

笠原 秋水

窓開けて吸ひ込む匂ひ遠花火

河野眞砂子

愛し妻鬪い尽きて露と消え

亀谷 学

関森 田鶴子 選

特選

盆僧の揃えてありし白鼻緒

原 佳子

麻生川風が舵取る花筏

大橋 政雄

竿一本足し帰省子の濯ぎもの

山口ちひろ

入選

駄菓子屋の大きく使ふ洪団扇

細貝 昭吾

鳥唄や水平線へ翳雲

山室みゆき

夏の旅ローカル駅の国訛り

原 佳子

江ノ電の音の軋みや桐の花

橋本 周

戦いの歴史緋く敗戦忌

橋本 周

肩上げの取れて加わる盆踊

朝岡芙貴代

決勝戦子に新米の大むすび

雨宮寿美子

バス停のポールの幅の日陰かな

内山 弘幸

草の根の思わぬ長さ引きにけり

米井 克夫

朝摘みの庭花生けて魂迎

西川 陽子

ぼんぼんと叩かれ西瓜買はれけり

早川 靖子

とぎれつつ風にのりくる踊唄

早川 靖子

多田昭彦選

特選

縞なして田の神渡る青田風

馬場身江子

絵手紙に一句も添えて夏野菜

原 佳子

足るを知る暮し重ねて新茶汲む

高品 小浜

入選

過疎の里野良着すんなり案山子立つ

三浦貴美子

炎昼を恐れぬ若き球児達

塩澤 烈子

獅子の鼻はなれ難しと蟬の殻

横川はっこう

菩提寺の過去帳めくる郷さとの夏

中山 善雄

麻生川風が舵取る花筏

大橋 政雄

黒川の月に届けとどんど焚く

大橋 政雄

柿熟れて絵となる里の雅かな

森 一二

散り際の群れあざやかな稲雀

森 一二

主待つベンチの帽子添う紅葉

朝岡芙貴代

薬缶ごと麦湯飲む児ら丸坊主

梅原 操

七変化経て錆色に秋紫陽花

豊田 洋子

灼熱の臭い炎昼のバス停

高宗 俊雄

都留嘉男選

特選

浜駆ける蹠より夏立ちにけり

貴島 閑歳

思い切り手を挙げて来る夏帽子

角田 珠子

秋扇さして中身のなき法話

山口ちひろ

入選

駄菓子屋の大きく使ふ洪団扇

細貝 昭吾

夏来たるブックカバーは空の色

本多 信子

盆僧の揃えてありし白鼻緒

原 佳子

晩年の枯野は埴輪の馬で行く

井上美沙子

棚経の僧侶の褒める窓の風

関森田鶴子

青春のロシア民謡キャンプの火

内山 弘幸

世の中のことはさて置き泥鰌鍋

内山 弘幸

蜻蛉のふはりと風の高さかな

春永 真央

後の事はあとに託さむ蛇穴に

米井 克夫

噛み跡の父の煙管や冬ざるる

野木 啓道

乗り継ぎはサルビアだけの小さな駅

芹澤しょう子

ぼんぼんと叩かれ西瓜買はれけり

早川 靖子

西村睦子選

橋本

周選

特選

山百合や帯解くやうに散り初そむる 野沢佐々代

特選

夕立やみんな一列軒の下 玉川 孝月

夏座敷集う昭和の子沢山 角田 珠子

江戸っ子の巻舌踊る熊手売 井上美沙子

天心に機の明滅や星月夜 藤森 成雄

ぼんぼんと叩かれ西瓜買はれけり 早川 靖子

入選

人伝に父の生い立ち震災忌 浅井 淳

入選

改札の奥に陣取る初帰燕 本多 孝次

浜駆ける蹠より夏立ちにけり 貴島 閑歳

足るを知る暮し重ねて新茶汲む 高品 小溪

常夜燈残る渡しの梅雨夕焼 伊原 文夫

初蟬や雨後の朝日をよじのぼる 池内 英夫

露けしや一揆誓ひし連判状 伊原 文夫

大寒や道着で駆くる豆剣士 深野 怜

春障子両家は今日が初対面 鯉淵 彩香

下駄の音肌に単衣の軽やかさ 秋場 正美

留守電に亡き友の声夏の果 中井紀久子

向き合へば踏み出す如き菊人形 森 一二

何事も終はりありけり大花火 内山 弘幸

何ひとつ置かぬ百畳寺涼し 雨宮寿美子

野仏の鼻かけており竹落葉 加藤すみ江

日本一長寿の里や柿たわわ 北條 雨鈍

誰かゐる野分のあとの姿見に 堀川 夏子

棚経の僧侶の褒める窓の風 関森田鶴子

ピッチャーはお下げの少女秋高し 花輪 佳子

バス停のポールの幅の日陰かな 内山 弘幸

薬より効き目確かや大昼寝 馬場身江子

能書きも壁に新し走り蕎麦 藤森 成雄

乗り継ぎはサルビアだけの小さな駅 芹澤しょう子

休耕田父母を偲ぶや里の秋 笠原 秋水

花輪佳子選

特選

山鳩のくぐもる朝や合飲の花
鈴^{りん}打ちて余韻の長き今朝の秋

山室みゆき

池内 英夫

日本一長寿の里や柿たわわ

北條 雨鈍

入選

夏の旅ローカル駅の国訛り
涼しさの新百合山手プラタナス

原 佳子

横川はっこう

手際よき庭師の鉄涼しかり

秋場 正美

分け入れば霧立つ山湖黙の中

大谷袈裟次

きつぱりと畳拭きあげ終戦日

小林 温子

何事も終はりありけり大花火

内山 弘幸

月天心波にきらきら月の道

梶野貴久子

お向かいのじ様お出かけバナマ帽

眞岡 八重

七変化経て錆色に秋紫陽花

豊田 洋子

一病を大事に生きて大昼寝

馬場身江子

八月を祈りつくして挽歌かな

野木 啓道

春うらら手足おもちゃに遊ぶ嬰

早川 靖子

馬場身江子選

特選

麻生川風が舵取る花筏
日本一長寿の里や柿たわわ

大橋 政雄

北條 雨鈍

八月や飛ばず語らず千羽鶴

笠原 秋水

入選

母の日や母の文字ほど佳き字なし
島唄や水平線へ翳雲

大川 和子

山室みゆき

欲張らず悔いなく二人敬老日

原 佳子

遅桜山は自然の四重奏

塩澤 烈子

ホームランの角度で柿の種とばし

衣笠みちを

争ひて軋む地球や星流る

滝澤 義忠

熟寝^{うまいど}児に青田百枚よりの風

池内 英夫

露草は星の欠片の瑠璃こぼす

井上美沙子

決勝戦子に新米の大むすび

雨宮寿美子

蜻蛉のふはりと風の高さかな

春永 真央

悔しさをアイスクャンディーにて冷ます

齋藤 秀章

暫くは夢と現の昼寝覚

早川 靖子

北條秀衛 選

町田黎子 選

特選 雛祭り連弾にわく駆ピアノ

三山まさみ

特選 争ひて軋む地球や星流る

滝澤 義忠

手際よき庭師の缺涼しかり

秋場 正美

縄文の暮し探れば木の実降る

雨宮寿美子

スーパームーン地球の病ひ問ふ秋思

北條 鈴子

蜻蛉のふはりと風の高さかな

春永 真央

入選 終雪や生き急ぐなと天の声

内山 元

入選 藍染めに涼風とおる夕べかな

吉野 芳子

縞なして田の神渡る青田風

馬場身江子

足るを知る暮し重ねて新茶汲む

高品 小溪

学童に円空仏の春の笑み

本多 孝次

麦笛や少年はみな風を負ひ

都留 嘉男

風薫る大樹堂々空を掃く

塩澤 烈子

江戸っ子の巻舌踊る熊手売

井上美沙子

晩年の枯野は埴輪の馬で行く

井上美沙子

秋深し土はすべての死を抱き

梶野貴久子

柿熟れて絵となる里の雅かな

森 一二

五更や残る炎暑の部屋ほめく

浅川 壽雄

雨去りぬ光をこぼす柿若葉

梶野貴久子

気まずさをほぐす糸口ところ天

井上 加代

柿熟るる長寿の里の農詩人

山室みゆき

梵鐘の音新涼の風起こす

伊原 文夫

泥んこを叱らぬ母や遠き夏

齋藤 秀章

ひそと立つ遊女の墓や女郎花をみなへし

山室 茂樹

キンキンの麦茶飲みほす野良仕事

庄司すずこ

美丈夫の夏華やかに二刀流

佐藤 次郎

フラココの蹴り上げ競ひ大夕焼

山田ミツエ

秋扇さして中身のなき法話

山口ちひろ

休耕田父母を偲ぶや里の秋

笠原 秋水

春の泥畦わだちに轍の跡残し

玉川 孝月

松本紀子 選

特選

麦笛や少年はみな風を負ひ

都留 嘉男

熟寝児うまいごに青田百枚よりの風

池内 英夫

柿若葉黄緑よぢり日を弾き

飯川 三無

入選

願い事重し重しと七夕竹

馬場身江子

夏バテや机の上の割ぼう着

玉川 孝月

天竜川てんりゅうの両手に抱く青田かな

塩澤 烈子

水打ちて木の影土に貼りつかす

池内 英夫

初蟬や雨後の朝日をよじのぼる

池内 英夫

おぼろの夜吾が身に少し源氏の血

坂本 巴

新走り酔うて余生が壊れそう

井上美沙子

晩年の枯野は埴輪の馬で行く

井上美沙子

秋深し土はすべての死を抱き

梶野貴久子

木耳きみみや遺構伝へる防空壕

田中 次男

生き甲斐はいつも後から酔芙蓉

北條 鈴子

乗り継ぎはサルビアだけの小さな駅

芹澤しょう子

森 かつじ 選

特選

麦笛や少年はみな風を負ひ

都留 嘉男

桜散る真つ只中の孤愁かな

梅野 威彦

蜻蛉のふはりと風の高さかな

春永 真央

入選

足るを知る暮し重ねて新茶汲む

高品 小溪

手際よき庭師の鉄涼しかり

秋場 正美

何ひとつ置かぬ百畳寺涼し

雨宮寿美子

思い切り手を挙げて来る夏帽子

角田 珠子

潮騒のいつか静まり夏果てぬ

石田 厚生

葉を落とし凜と空見る冬木立

南 孝子

独り居の小さな幸せ昼寝かな

眞岡 八重

街灯の青く点されるて無月

堀川 夏子

うたた寝の手足に重し梅雨の音

米井 克夫

美丈夫の夏華やかに二刀流

佐藤 次郎

一病を大事に生きて大昼寝

馬場身江子

フラココの蹴り上げ競ひ大夕焼

山田ミツエ

門伝史会選

山室樹声選

特選

稲妻の一太刀浴びるホームかな

秋場 正美

泥大根葉付きも人気直売店

大橋 政雄

日本一の長寿言祝ぐ蟬時雨

朝岡芙貴代

入選

澄む秋や生きし化石の大銀杏
足るを知る暮し重ねて新茶汲む

塩澤 烈子
高品 小溪

夏安居写経止めたる雨の音

長谷川英俊

雨上り一斉に湧く蟬しぐれ

秋場 正美

銀輪の風切る光り土手青む

梅野 威彦

敬老日卒寿たをやかヨガポーズ

雨宮寿美子

コスモスを見てるふりして君を見る

大橋 政雄

日本一長寿の里や柿たわわ

北條 雨鈍

春の風仔やぎ放たれ飛び跳る

竹田 勲央

野の色を飾る食卓吾亦紅

春永 真央

草の根の思わぬ長さ引きにけり

米井 克夫

一病を大事に生きて大昼寝

馬場身江子

特選

思い切り手を挙げて来る夏帽子

角田 珠子

柿熟るる長寿の里の農詩人

山室みゆき

小玉西瓜笑つちやうほど撫でてやる

松本 紀子

入選

願い事重し重しと七夕竹

馬場身江子

足るを知る暮し重ねて新茶汲む

高品 小溪

山嶋やどの道ゆくも春の雪

三山まさみ

コロナ超え笑顔笑顔の柿祭

衣笠みちを

熟寝^{うまいご}児に青田百枚よりの風

池内 英夫

銀輪の風切る光り土手青む

梅野 威彦

留守電に亡き友の声夏の果

中井紀久子

外国の曾孫大暑の日本旅

南 孝子

泥に汗そして涙の球児たち

齋藤 秀章

竿一本足し帰省子の濯ぎもの

山口ちひろ

夏野菜子らのもとへと宅急便

庄司すずこ

露寒し逝く妻摩る老夫の手

亀谷 学

山元 志津香 選

特選

母の日や母の文字ほど佳き字なし 大川 和子

日本一長寿の里や柿たわわ 北條 雨鮎

柿熟るる長寿の里の農詩人 山室みゆき

入選

日本一高き駅舎に買ふアイス 山室 茂樹

うららかや柿生に今風羅漢さま 嘉瀬志津子

蕈茸の飛驒の山霧奔りづめ 山下 升子

熟寝児うまいごに青田百枚よりの風 池内 英夫

桜散る真つ只中の孤愁かな 梅野 威彦

まなうらに花火しだるる帰路のバス 大谷袈裟次

敬老日卒寿たをやかヨガポーズ 雨宮寿美子

フラッペと言ひ換へ豪華かき氷 中井紀久子

包丁の食ひ込む南瓜夫を呼ぶ 松原賀壽子

ただいまと金魚に声や独りかな 庄司すずこ

花は葉に日の斑きらめく麻生川 藤森 成雄

汝と吾ともに白髪の朝寝かな 野木 啓道

山本 奈保美 選

特選

夏来たるブックカバーは空の色 本多 信子

ラタトウイユも出たる蕎麦屋の夏料理 神宝 浩

日本一長寿の里や柿たわわ 北條 雨鮎

入選

コロナ超え笑顔笑顔の柿祭 衣笠みちを

麻生川風が舵取る花筏 大橋 政雄

きゅうり揉む夫を褒め上げさて次は 来生 慶子

外国の曾孫大暑の日本旅 南 孝子

レイトショー果てて無月の昇降機 後藤 園生

いつだって生きる方へと向日葵黄 松本 紀子

うたた寝の手足に重し梅雨の音 米井 克夫

新蕎麦や毎時に鐘の善光寺 小沢 卯月

露草は星の欠片の瑠璃こぼす 井上美沙子

うららかや言葉封ずる人差指 斉藤きのと

ようやつと簾収めていつもの茶の間 河野眞砂子

かわさき市今度の文月祝百年 内山 元

横川 はつこう 選

特選

浜駆ける蹠より夏立ちにけり

貴島 閑歳

晩年の枯野は埴輪の馬で行く

井上美沙子

青春のあの日の疼き草いきれ

米井 克夫

入選

夏霧の木々閑やかに五色の湯

柿沼 正之

足るを知る暮し重ねて新茶汲む

高品 小溪

鈴打ちて余韻の長き今朝の秋

池内 英夫

うす紅葉水着の君と河原の温泉

梶野貴久子

黒川の月に届けとどんど焚く

大橋 政雄

きっぱりと畳拭きあげ終戦日

小林 温子

砂浜の二人の距離や晩夏なり

梅原 操

世の中のことはさて置き泥鰯鍋

内山 弘幸

竿一本足し帰省子の濯ぎもの

山口ちひろ

いつだって生きる方へと向日葵黄

松本 紀子

八寸の秋をいたたく京泊り

野木 啓道

乗り継ぎはサルビアだけの小さな駅

芹澤しょう子

吉田 功 選

特選

緑陰やS L巨軀を休めをり

横川はつこう

山眠る多摩丘陵を懐ふとこころに

上山 暢子

日本一の長寿言祝ぐ蟬時雨

朝岡芙貴代

入選

闊歩する日傘男子の咽仏

細貝 昭吾

忘れ得ぬ揺れの有る都度東北忌

内山 元

夏空や相模湾越し富士の峰

吉野 芳子

合格の御礼参りやすまし顔

本多 孝次

絵手紙に一句も添えて夏野菜

原 佳子

江ノ電の音の軋みや桐の花

橋本 周

麻生川風が舵取る花筏

大橋 政雄

何ひとつ置かぬ百畳寺涼し

雨宮寿美子

残暑避け生田緑地に憩ふ午後

豊田 洋子

休耕田父母を偲ぶや里の秋

笠原 秋水

町おこし担ふ音大合歓の花

後藤 園生

兜太の句くり返し読む良夜かな

河野眞砂子

あとがき

第三十五回麻生区俳句大会（令和五年十月二十一日実施）の入選句集をお届けします。

本年は昨年とほぼ同様の四三九句の応募がありました。応募いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

全応募句を作品集にまとめ、麻生区在住の二十六名の先生にお願いし、特選三句、入選十二句の計十五句を御選句いただきました。特選は二点、入選は一点として集計の結果、川崎市長賞を始め入選者九名、および優秀賞者二十名を別記の通り決定しました。

ただし、お一人で複数句が上位の得点を得られました方は、最上位の句のみの賞となりましたこと、ご了承ください。

当日句会の方は、参加者全員の相互選により順位

を決定し、上位十名を表彰いたしました。

麻生区は嬉しいことに、日本一の長寿の里であると共に、さまざまな文化活動が盛んな区です。麻生区文化協会は「新しい風と創造」をテーマに文化活動の維持と発展に寄与して参ります。

また明年も第三十六回麻生区俳句大会を実施しますので、多くの皆様のご応募を、今からお願ひ申し上げます。

皆様、俳句づくりに頭を絞り、いつまでも若々しい頭脳を保って参りましょう。

令和五年十月吉日

第三十五回麻生区俳句大会実行委員会

委員長 山 室 樹 声

発行

川崎市麻生区万福寺一―五―二

(麻生文化センター内)

麻生区文化協会

会長 菅原敬子

編集

第三十五回麻生区俳句大会

実行委員長 山室茂樹